卒業の日に　贈る言葉

中央大学から未来社会への門出を祝う

学長
福原 紀彦
Tadahiko FUKUHARA

中央大学の学位記を取得された皆さんに対して、在学中の研鑽と健闘を称え、未来社会への門出のときを迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

Society5.0 とも称される今後の人類社会は、グローバル化の進展とともに情報化社会がいっそう高度化した知識基盤社会です。そこでは、与えられた情報から必要な情報を引き出して活用することができるリテラシーに加えて、獲得した知識と技能を生かし、未知の課題であっても創造的かつ自発的に取り組むことができる「コンピテンシー」を身につけ、グローバルな視点と発想で活躍できる能力と資質がいっそう強く求められます。本学の建学の精神である「實地應用ノ素ヲ養フ」という表現にある「素」とは、このコンピテンシーにほかなりません。そして、今日では「行動する知性」をユニバーシティメッセージとしている本学は、いつの時代であっても、社会と向き合い、社会とともにあって、社会を変革し社会を支えるために有為な人材を輩出し、本学は、その伝統を未来に活かす学びと出会いの機会を大切にしてきました。

皆さんは、そうした中央大学でのさまざまな学びと活動の場において、多くの人達との交流によって、多様な知識と技能を獲得し、「行動する知性」を磨き、高めてきました。大学での修学を通じて身につけた知性というものは、決して自分ひとりのためにあるのではなく、社会性と公共性をもっていることにくれぐれも留意されて、今後いっそう、それぞれの立場で、社会への貢献に努めて戴きたいと思います。

中央大学の前身であった学校や学院の卒業証書には、「右者・・所定ノ・・ヲ修メ茲ニ其業ヲ卒フ依ッテ卒業證書ヲ授與シ爰ニ之ヲ證ス爾後永ク本校校友タルノ特權ヲ享有スベシ」と記載されていました。後段に込められた願いこそ本学の卒業証書の真髄であり、今日の学位記にはそこまでの記載はないものの、同様の願いが込められていると言ってよいでしょう。すなわち、皆さんが手にされた学位記は、所定の単位を取得して課程を修了した証しであるとともに、中央大学の建学の精神にもとづく歴史と伝統を引継ぎ、本学のネットワークを活用して現代社会で「行動する知性」を発揮することができる能力と資格の証しでもあるのです。

誰にでも未来を語る自由はありますが、伝統や実績を踏まえてこそ語ることができる未来があります。卒業生の皆さんの活躍の舞台としての「航路」はさまざまでしょうが、皆さんの母校となる中央大学は、いつでも、いつまでも、どこでも、どこまでも、皆さんの「母港」であり続けたいと思います。生涯学び続けて、未来社会を拓き築き支えながら、人生を輝かせるために、今後もいろいろな機会に、本学との絆を大切にして戴ければ幸いです。そして、卒業生の皆さんが、中央大学の卒業生であるという誇りをもって、これからの人生を堂々と歩まれることを祈っています。本当に、卒業おめでとう。この時期に巡り会った人間関係、これから巡り会う人間関係を大切にして、元気にご活躍下さい。中央大学教職員一同より、心を込めて、Bon Voyage!

常に学ぶ姿勢と人間関係を大切に

法学部長
星野 智
Satoshi HOSHINO

卒業される皆さんに対して、心から敬意を表しますとともに、お祝い申し上げます。また、ご家族をはじめとして、これまで皆さんを支えてこられた全ての方々に心よりお祝い申し上げます。

卒業に当たって、みなさんが入学した当時と現在とを比較した場合、自分の総合的な能力に関して大きな変化があったことを改めて実感していただきたいと思います。「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず」という有名な言葉がありますが、これは若いうちに勉学に勤しめという意味の言葉です。皆さんは、長い人生のうちの大学生活の４年間という短いあいだにさまざまな貴重な学びを経験したと思います。

中央大学のユニバーシティメッセージでいえば「行動する知性。」が知らず知らずのうちに身についたということができると思います。卒業に必要な120単位以上の授業を通して、それぞれの分野における総合的な知識を涵養したはずです。しかし、知性は決して授業時間の総和によって測られるものではなく、大学生活のなかで培った社会を見る眼、物事へ取り組む積極的な姿勢に裏付けされるものであります。この点においても、皆さんが大学生活４年間でこのような知性を身につけたものと確信しています。

また大学４年間で得た成果は、それだけではなく、多くの人びととの出会い、そして人間関係の形成にあると思います。大学入学時に最初の語学のクラスや演習で出会った友人や教員、またサークルや部活で出会った監督・コーチや先輩のOG・OBなど、そして留学先やインターン先で出会った人びと、これらの人間関係は、ソーシャル・キャピタル（人間関係資本）としてのまさに「資本」であり、卒業後にも活かせる貴重な財産です。

ひとりの人間の人格的な厚みは、それ自体として自己形成されるものではなく、他者との人間関係のなかで一枚一枚外皮として形成されるものであります。したがって、その意味で、みなさんはこの４年間で「行動する知性。」と同時に多様な人間関係という「資本」を身につけ、大きく変化したことでしょう。

これからは人生100年時代ともいわれています。また皆さんは卒業後にこのような長寿社会を見越した働き方と生き方を考え続けなくてはならないでしょうから、社会あるいは世界の動きを恒に見渡せる長期的な視点が大切になってくるでしょう。卒業後においても、常にエンパワーメント、知識のチャージと能力の向上への弛まぬ努力を継続していただきたいと思います。

卒業後に、皆さんが職場や学校などそれぞれの新しい生活の場や分野で、これらの知と「資本」を十分に活用して活躍されることを切に願っております。

「当たり前」のことを当たり前に

経済学部長
篠原 正博
Masahiro SHINOHARA

卒業生のみなさん、そしてみなさんを支えてこられたご家族のみなさま、ご卒業おめでとうございます。大学で専門分野の学問を修められたみなさんは、これからの新しい日本を築く方々です。心からの期待を込めてお祝い申し上げます。

さて、みなさんは新しい人生にわくわくされていることと思いますが、先に社会に出た先輩として、アドバイスを若干したいと思います。

若いみなさんにとって健康でいることは「当たり前」のことでしょう。しかし、仕事上のストレスや無理で心と身体のバランスを崩し、仕事や人生のゴールを前に倒れてしまった方をみてきました。日々の食事に少し気を配るだけでも、結果は大きく違ってくるものです。例えば、みなさんが大好きな「焼き肉」や「牛丼」に「豚カツ」など・・・、脂身がおいしいですね。しかし、すき焼きを食べ終わった鍋をそのままにして、油が白く固まっているのを見たことがありませんか？食用の肉としては牛・豚・鶏が一般的ですが、牛も豚も鶏も体温が40度前後あり、その体温の中で脂肪が固まらずにいるのです。みなさんがご存じのように、人間の体温は36度前後です。その血管の中で白く固まった油をイメージしてください。動脈硬化の原因になりますね。唯一、鶏肉だけは油分の融点が低いため、動脈硬化に影響しにくいといえます。ただし「鶏の唐揚げ」をラード（豚油）などで揚げてなければのはなしですが・・・。食事の度に、健康を意識し「選ぶ」ことで、ある程度の自己防衛ができることを覚えてください。

仕事の発想に常識など不必要ですが、仕事や日常の人間関係には、この常識が大切です。「今の若者は常識がない」と思われている現在、礼儀や感謝などの、みなさんが古くさいと思われる態度が個々の評価に大きくかかわるものなのです。

私の中大生に対するイメージは、「素直で」、「真面目で」、「堅実」です。「ウサギ」と「カメ」に例えると、「カメ」さんタイプが多く、一歩一歩が着実です。これからの人生はサバイバルになるでしょうが、「時間を守る」、「約束を守る」、「挨拶をする」などの「当たり前」のことを当たり前にできる人になってください。みなさんのご成功をお祈りいたします。

他人（ヒト）は変えられない　人は変わるもの

商学部長
渡辺 岳夫
Takeo WATANABE

卒業おめでとうございます。長い学生生活もいよいよ終わり、これから多くの人は権限と役割の階層関係から成り立っている「組織」において、少なくとも１日の三分の一を過ごすことになるでしょう。最初に属するレイヤーでは、おそらく自分が自由に振る舞うことのできる仕事のシーンは少ないでしょう。しかし、どんな仕事でも、自分の創意工夫を反映させる余地はあります。ある有名なコーヒーチェーンの会社の元社長の話ですが、駅前でコーヒーの割引券を街行く人に配る仕事にバイトが苦戦しているのを見て、代わりに社長自身が配ってみたところ、たった１時間余りで配布しきってしまったそうです。一見、つまらないルーティン業務でも，簡単すぎてつまらないと思えるような仕事でも、心の持ち様や見方を変えれば取り組みがいのあるものに変えることができるのです。組織において腐ってしまいそうな時には、自分の頭の中にある凝り固まったフレームをチェンジしてみましょう。

さて、そしていずれ諸君は「組織」におけるリーダーになっていくことでしょう。中央大学の卒業生の多くがそうであるように。上位のレイヤーに属するようになると、「組織」が実に人間臭い人間の集団であることを，否が応でも理解するようになるでしょう。人によって価値観、思想、宗教、あるいは善悪の基準などが多様であり、組織のために良かれと思ってしたことが、実際には組織にネガティブな影響を及ぼしてしまうこともあるのです。そういった際に、リーダーとしての皆さんはきっとこう思うでしょう。「他人（ヒト）を組織にとって望ましい方向に変えたい」と。しかし、他人（ヒト）は変えられません。人は自らの意思によってしか自らを変えることはできないのです。つまり人は変わることしかできないのです。リーダーとしてのあなたができることは、人が自ら変わることができるような環境や条件を整えてあげることです。他人（ヒト）を変えられないと嘆いたり、自分の周りにはどうしてこんな他人（ヒト）ばかり集まるのだと不満を漏らしたりするべきではありません。それらは、自分にはリーダーとしての資質がないということを、周囲に知らしめる効果しかありません。

自分を変えられるのは自分だけです。たとえ毎日する仕事が同じでも、心の持ち様次第で、その仕事に対する取組みを変えられます。心の持ち様を自ら変えることができるような、そして他人（ヒト）が心の持ち様を自然に変えることができるような環境を創ることができるような、そんな人を目指しませんか？

科学技術が社会を変革する時代のリーダーに！

理工学部長
樫山 和男
Kazuo KASHIYAMA

理工学部卒業生および理工学研究科修了生の皆さん、ご卒業・ご修了誠におめでとうございます。皆さんは、４月から始まる新生活への期待に胸をふくらましているものと拝察いたします。

わが国では３年前に策定された科学技術における基本計画（第５期科学技術基本計画）において、近未来の社会像として「Society5.0」の概念が提唱され、現在その実現に向けて急速に動き出しています。この科学技術が牽引するSociety5.0では、IoT（Internet of Things）で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、経済的発展と社会的課題の解決を両立させて、人々が活力に満ちた質の高い生活を送ることのできる「超スマート社会」の構築を目指しています。そして、Society5.0のキーワードであるAI、IoT、ビックデータ、５G、ロボット、自動運転技術等に関する研究成果や実用化のニュースが毎日のようにメディアをにぎわせています。AIという言葉は、60年以上も前から登場しこれまでに何度かブームがありましたが、近年の情報通信技術の飛躍的な進歩により、今まさに社会を大きく変える技術に成長しています。AI等の普及により今後失われる職業も出てくるでしょうが、逆に新たなビジネスチャンスも広がっていきます。皆さんには、科学者・技術者として大いなるチャレンジ精神を持ち、科学技術が社会を変革する時代のリーダーとして活躍していただきたいと思います。

理工学部および理工学研究科の卒業生・修了生はこれまでに約６万３千人を数え、大手企業や公務員等でトップとなられた方も多数おり、様々な分野において目覚しい活躍をしております。皆さんも先輩方の後に続いて、「中大理工」の名声をさらに高めてください。

最後になりますが、理工学部は、来年度創立70周年の節目の年を迎えます。そして、これをお祝いするために2019年９月28日（土）に記念行事・祝賀会を開催する予定です。また、その翌日にはこれまで多摩キャンパスにて行われていたホームカミングデーを後楽園キャンパスにて初開催いたします。是非、元気な姿で再び後楽園キャンパスに戻ってきてください。皆さんのご活躍を心より祈念いたします。

中央大学で学んだことをこれからに

文学部長
宇佐美 毅
Takeshi USAMI

中央大学を卒業することになった皆さん、おめでとうございます。皆さんのこれまでの努力が、今日のこの大きな花を咲かせたのだと思います。皆さんを支えてきたご家族やお友だち、先生方にもあわせてお祝いの言葉を申し上げます。今、皆さんが持っている気持ち、晴れやかで希望に満ちたその気持ちを、どうかこれからも大切にしていってください。

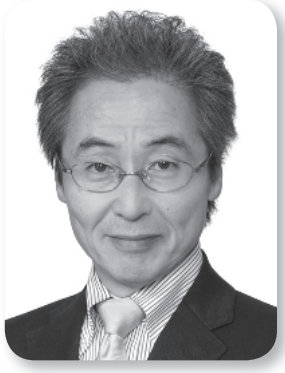
ただ、そのお祝いの時に、いささかふさわしくないこともお伝えしようと思います。それは、皆さんが今心の中に持っている夢や願いの多くは、叶うことがないかもしれないということです。「夢はあきらめなければいつか叶う」とよく言われますが、本当にそうなる人もいれば、そうならなかった人も実際には多くいるはずです。

しかし、自分が考えている通りにならないことがあっても、それを受けとめて前に進もうとするからこそ、皆さんの人生は大切で価値のあるものなのです。ゲームであればリセットしてはじめからやり直すこともできるでしょう。しかし、皆さんの人生にリセットボタンはありません。だからこそ、思い描いた通りにならないときには、この中央大学のことを思い出してほしいのです。

皆さんがこの４年間で学んだことは、単なる断片的な知識や、本の中だけに閉じられた知恵ではなかったはずです。皆さんは、講義、ゼミ、レポート、試験、合宿、フィールドワーク、研究発表、論文制作等々を通じて、課題発見能力、文献読解能力、プレゼンテーション能力、問題解決能力などを鍛えてきました。また、それらの研究活動や課外活動を通じて、多くの人と接し、その中でコミュニケーション能力を鍛え、人とかかわりながら考えることの大切さを学んできました。

この中央大学で学んだそれらの能力、育んだ人間関係は、既に終わった過去のものではなく、皆さんのこれからの人生を豊かにするためにあります。それらを駆使すれば、皆さんの人生を一歩ずつ前に進めていくことがきっとできるはずです。自分の人生が思い描いていた通りにいかないその時にこそ、皆さんがこの中央大学の卒業生であることを思い出してください。そこで何ができるのか。それこそが皆さん一人一人の真価なのだと、私は強く信じています。

学びの徳の途上



総合政策学部長
堤 和通
Kazumichi TSUTSUMI

テニスの大坂なおみ選手がグランドスラムで初優勝を果たした全米オープンの決勝はセリーナ・ウィリアムズが対戦相手でした。大坂選手にとって憧れの選手、セリーナは試合中は「一人の対戦相手」であったといいます。

セリーナは、大坂選手が背中を追いかけたアイドルでありながら、試合中には一人の対戦相手であった、という経験は「内的善」という概念を想起させます。内的善とは、スポーツ、ゲーム、学問など、その分野の卓越性が人間の可能性を教え、それにかかわる人々を豊かにする側面を指します。このような分野での営みが内的善の基準に適うには、フォワードのポジションには誰がいいのかといった、誰に何がふさわしいのかを見分ける術を知る必要があり、自身に割り当てられた課題を所定の期日に終える約束を取り交わし、他にできる諸々のことを断念するなど、その営みのコストとリスクを引き受ける覚悟が求められ、また、自身の不十分さの指摘に耳を傾け応答する姿勢が必要です。誰に何を割り当てるのかを共通の尺度で定めようとする正義の徳、未知のものに果敢に挑む勇気の徳、自身の不十分さを認める正直の徳が求められるといえるでしょう。

大坂選手はテニスを続ける中で、よいプレイとは何か、優れた選手の資質は何かを見極め、その尺度から、人種や信条を考慮に入れずに、その尺度のみで評価し、コーチや支援者の期待に添うように敢えて高い目標を設けて自らに挑戦し、コーチや他の選手からの厳しい指摘に謙虚に耳を傾け、自身で直視する、ということを想像を絶するほど積み重ねてきたのではないかと思います。

その研鑽は想像を越えますが、大坂選手が試合ではセリーナが一対戦相手であったというのは、同時に、内的善の徳の積み重ねがその人を自由にするものであることを物語っているように思います。謙虚に虚心坦懐に学び続けることが、その分野で先達に対して対等に向き合える、ということを物語っているように思います。

皆さんにとって四年間の学びは学問を修めることに努めるというものであったはずです。この学びが内的善に適うものであったとすれば、それに必要な徳を積むことで、先人の到達点に敬意を払いながらその分野に対し自身の立場から貢献する、という姿勢を身に付けたことと思います。学びの徳を修める途上にある皆さん。健闘を祈ります。